

ろくごうにあり ◆ じゅのまき

❖ 呪の巻

陋巷に在り 2

酒見賢一

新潮社



ろくこうにあり・じゆのまき ◆ 晩の巻

陋巷に在り

酒見賢一

新潮社

陋巷に在り 2 呪の巻

一九九三年八月一五日発行

著者 酒見賢一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（営業部）03—33266151—22

（編集部）03—33266154—22

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

価格はカバーに表示しております。



© Kenichi Sakemi 1993,
Printed in Japan

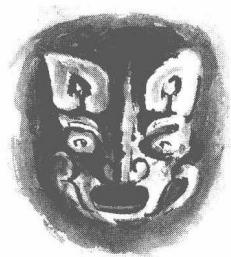
（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-375105-3 C0093

陋巷に在り

2 呪の巻

目次



鬻簞
(二)

78

鬻簞^{とうてつ}
(一)

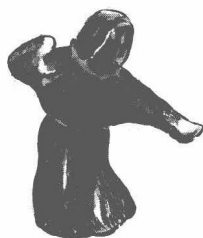
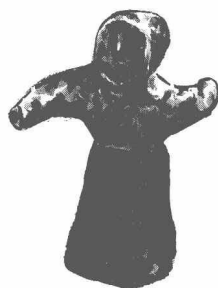
52

放逐
(三)

17

放逐
(二)

7



八佾^{はちいっ}
(二)

126

八佾^{はちいっ}
(三)

146

魯国妖風
(二)

188

魯国妖風
(三)

240



装画・カット
装幀

諸星大二郎
新潮社装幀室

陋巷ろうこうに在あり

2
呪じゆの巻

呪

もとの字は祝^{いそ}。呪は祝より分化した字で、呪詛のときに用いる。兄は祝禱の器を戴いて、祈る人の形。そこに神氣の下るのは兌。祝禱の器を列ねて祈るので、字はまた咒に作る。…呪は必ずしも呪詛のことのみでなく、禁忌全般のことにわたるもので、古くは祝の字を用いた。

——白川静「字統」より

放逐（一）



定公八年（前五〇二）二月。

陽虎の専制下にある魯が行った一連の戦争を見ると、いずれも軍事的、政略的にどういう意味を持つものだったのか納得のゆく説明ができない。どんな意義があったのか考えさせられてしまう。

「戦果などなくてもかまわないのだ」

という陽虎の声が聞こえてきそうである。

廩丘の攻略戦は激しいものとなった。陽虎は前線近くで指揮をとった。廩丘は齊衛の国境近くにあり、齊の対衛軍事拠点でもある。並みの城よりも防備がかたい。陽虎はこの城を無理押しに攻めた。勝利を期すのなら、晋からの援軍を得るか、衛に兵を馳走させるべきである。だがそういうことはまったくせず、魯だけで単独で攻めた。率いた兵も魯国の総力ではなく、勝つ意欲が見られなかった。

魯軍は戦車を改造した衝車しょうしゃを使って城の外郭を攻撃した。衝車は城門や城壁を撞き崩すための兵器である。城壁などに何度も打ちつけて破壊せしめる。

陽虎は逃げる機をうかがいながら戦っていたようである。国夏が馳せ戻り廩丘ごと魯軍を逆包囲する恐れもある。また、先月の陽州の戦きの時と同じように顔儒の者が邪魔な企てをしている

氣配もあった。陽州の時、陽虎の身は一時だが、かなりの危機にさらされたのである。顔高、顔息らは弓の達者であつて、陽虎は危うく射られる所であつたのだ。籍丘子鉏と冉猛はじつは陽虎の配下であり、ボディガード的な役割の男たちであつた。子鉏は齊人として殺され、冉猛も手傷を負つた。陽虎が激怒し、顔氏への報復を思い立つたのも当然であつた。

廩丘の戦いはなおも続いている。衝車に火をかけられ、魯軍は一時は総崩れとなりかけた。麻布を濡らしたもので衝車を覆い、火を防ぎながら攻撃を続行した。だが、魯兵の辛抱もこのあたりで尽きた。廩丘の外郭を撞き崩すことには成功したが後が続かない。機を見て廩丘の兵が門を開き出撃してきた。

陽虎が襲われたのはこの時である。魯兵の一部が崩れて陽虎の方に逃げてきたのだが、その中から矢がひゅつと飛んできて陽虎をかすめた。数名の者が矛をかかけて陽虎の戦車に向かつてきた。

「冉猛、冉会」

と陽虎は叫んだ。

「冉猛、ここにいればきつと勝てる。あわてずにやれい」

冉猛と冉会は陽虎を守るべく車を前に出し、飛び降りた。

「二度も同じ手とはみくびられたものだ」

陽虎の表情には危機感がなかつた。陽虎に向かつてきた兵数名は近づくにしたがつて動きが緩慢となった。冉猛、冉会は剣槍をふるって斬り殺していった。敵の動きが妙にぎこちなかつた。明らかに呪縛がかけられている。冉猛らは敵を楽に屍に変えていった。ただ突進してきた兵の背後に隠れていた者が放った小弓を防ぎきれなかつた。その者は僇僕であつて、余計に見えにくかつたのだ。短矢は冉猛の上着をかすめただけだつた。だが、鐵にはある種の毒が塗布してあつた。

暗殺者たちが失敗を悟り逃走するのを冉猛は再び戦車を駆って追撃した。その時になって冉猛の矢傷から毒が回った。冉猛はひどくゆっくりと車から落下していった。落ち方が不自然だった。人々にはその姿はわざと車から落ちたように見えた。

陽虎は苦しむ冉猛を無視して、自分を狙った、まだ息のある僂僂者に近づいた。

「顔儒の者か？」

と陽虎が訊いた。返事を期待しているわけではない。

「前回のようにはいかなかったろう。わしが刺客よけの呪禁を行っていたことに気がつかなかったのか？」

陽虎は苦痛に表情を歪める相手を冷笑した。

「お、お前の術など見かけただけだ。真物ではない……」

と顔儒の実戦部隊の者が呻く。

「それを言うならおぬしらもだ。どちらも見かけただけだ。げんに礼を専らにするという一族が暗殺などという礼に外れたことをしているではないか。品のないことだな」

と陽虎は言った。もっと罵声を浴びせようとしたが、相手が絶息しているのに気づいてやめた。

「顔儒め。この責は高くつくぞ」

陽虎は車に戻ると指揮を再開した。

この後、陽虎は総崩れになった魯兵をまとめることに忙殺された。ようやく撤退した。麋丘攻めはこうして益なく終わった。定公が率いたということになっているこの魯軍が曲阜に帰還したのは月をまたいで三月であった。

陽虎は稀代の謀略家であり野心家であった。その能力においてこの時代に彼に匹敵する者はおそらく存在しない。

春秋時代ではまだ策士たちには本格的な活躍の場は与えられていない。かりに陽虎が戦国時代のただ中に生まれていれば、史書に特筆されるほどの縦横を見ることができたかもしれない。

謀略家は陰陽に通曉していなければならぬ。政と謀の裏表を同時に行えてこそ成功が開ける。ただし、いかにその能力に卓越しようと、ある条件を満たさねば事は成就することがない。その条件とは命であり、運である。この道ばかりは人為ではいかんともしがたいのである。

陽虎は廩丘攻めの事後処理を終えたその日、帰宅すると家人を遠ざけて堂奥に籠った。そして易をたてた。易こそは陰陽変化の道を知る最良の法である。陽虎が易の熟達者であったことは「左伝」に示されている。

「易経（周易）」が孔子の頃にどの程度形を整えていたかをはつきりとは断定することができない。舊（ふる）を使用する占卜（せんぼく）の法は周代に広く行われるようになったらしいが、これが直接「易」となったかどうかは判然（せんぜん）としない。孔子が晩年に易を好み、「十翼」とよばれる伝（解説）を作成したという伝説がある。また易の占例を「左伝」その他にいくらか見ることができるともこの件に関しては研究者の間でも未だに疑問符がつけられていて、実際どうだったかについては作者の理解を超えている。

「易」は「詩」や「書」と違ってひどく特異な経書である。「易」は周代の巫祝（ふしやく）や占筮官（せんぜい）が長い時間をかけて編み出した魔術的で神秘的な占卜の法なのである。敢えて必ずしもオカルト視する必要はないが、易は古代中国人の世界観、宇宙観、ものの考え方の根幹をなす思想の一つといえよう。おそらく特別な者しか学ぶことが許されない禁断の学であつたらう。孔子がそういう危険な学に関して多くを語らないのは当然といえ、後代、政略家や軍略家など敵味方の陰陽表裏動静を的確に知る必要のある人々にとって易は必修の学となった。表向きは易は聖人君子の大儒学であるが、その使用にあたっては必ずしも儒教道徳を意識する必要はない。易は高

度な判断と予測のための数の秘術でもある。陽虎がどういう者であったかは、易のような神妙の学に通じていたこともその正体を示す大きなヒントであろう。

陽虎は暗がりで笹竹の束を握り、解き、分けて、操りながら意識を集中させていった。占意は言うまでもなく現状における陽虎の位置である。具体的に言えば計画をこのまま続行すべきか一時停止すべきかということである。陽虎の頭脳と意思は計画続行を当然のことと定めている。だが、心に一片の不安が浮かんた。動くか動かざるか。この一決が運命の変化の次の動きをまた規定する。

やがて占断は下された。卦は「困」であつた。☵☵である困は水の上に沢がある形である。暗く湿ったイメージがあり、易学では八方塞がりの極めつけの凶卦の一つとされる。ただし、大人ならば吉卦であり、願望は亨という正反対の意味も持っている。聖人君子は困にあらうといかほどのことでもないということである（ちなみに註ではこのことを顔回が陋巷の困窮を楽しんだ例をあげて説明している）。

「わしが大人ならば計略はうまく行くということか」

陽虎はそう呟くと笹竹を放り投げた。

「易の意地の悪さが出たな。その人間が大人か小人かをだれが決めるというのだ。つまりは天が決めるということではないか。自らが自らを大人と断ずるような、わしはそんな愚か者ではない」

と陽虎は笑わずにはいられなかった。

陽虎は謀議をやめなかった。

陽虎の方針はすでに決定しており、そのように進んでいる。魯軍の掌握は完全ではないにしろ、順当であつた。もはや兵たちは陽虎が指揮を取っていることに疑問を抱かなくなつていた。

三桓家を叩き潰してしまふ具体的な方策としては、家中の不平分子の糾合があった。季孫氏では季桓子の実弟の季寤に利益をふくませている。季桓子を殺害してしまえば季寤が季孫家の当主となる。そう吹き込んだ。当初から季桓子の相続に不満を抱いていた季寤は他愛なく乗ってきつた。また季孫氏の分家筋で季桓子と反目している公鉏極にも話を通じてある。費城の宰（代官）である公山不狃もいまだに季桓子への忠義を考えたりはしないはずである。仲梁懷追放の一件以来、季桓子と公山不狃の仲は陰悪となっていた。

季孫氏だけではない。陽虎は叔孫氏にも手を伸ばしている。当主の叔孫武叔の庶子である叔孫輒は武叔に好まれていなかった。輒にはこのままでは先の保証がない。陽虎はその点を突いてそのかし、つけこんだ。武叔を殺した後を襲わせて叔孫輒を当主とするという密約を交わしていた。また一族内の放蕩者でもあまされがちな叔仲志が、うだつの上がらない現状に嫌気がさしてこの企みに乗ってきた。

孟孫氏は意外に結束が固く、不平分子が見つからなかった。だが、孟懿子は特にただで済ますつもりはない。陽虎自らの手で孟孫家を滅ぼす腹づもりであった。公斂處父も血祭りにあげる輩の筆頭においていた。そして陽虎自身は孟懿子に代わって孟孫家を取るのである。季寤の季孫家、叔孫輒の叔孫家、陽虎の孟孫家、まずこの図式を作りあげるのである。ただし、これは一時のことである。成功後はいつまでも叔孫輒や季寤をさばらせることはない。二人を始末して名実ともに陽虎は三桓家を兼ねたあるじとなる。最終的には三桓家を解体し、定公も下敷きにし、魯の最高権力者として陽虎だけが残るのである。

公室に無関係の上、素姓も定かならぬ一陪臣の陽虎が、これだけのことを企画し実行して見せようとしている。尋常のことではない。陽虎が春秋屈指の怪物であったと言われる所以である。これが成功していれば晋が三国に分裂する戦国時代開始の決定的事件にもかなり先立つ下剋上事

件となつたはずである。

陽虎はすぐにも詰め手を打ち始めたいところであつた。おのれが大人であるか小人であるかは行動によつて天に問うのである。

魯国にとつて、あわや、という時であつたのだが、一度は逃れることができた。陽虎に邪魔が入つたのである。

陽虎のもとに斉軍侵攻の報が入つたのは三月末のことであつた。斉の国夏と高張こうちやうが陣を立て直して西部方面から押し入つて来るといふ。これまでになく大軍が動員されていた。塵丘方面からの出動である。斉の報復は予想できないこともなかったが、動員兵力が予想をはるかに上回つてゐる。

陽虎が朝廷にゆくと、大臣たちは毎度のことながら無策に顔を蒼あはざめさせて声を張り上げるばかりである。

「陽虎よ、この度の事態をどうするのだ。やはり斉に従つておればよかったのだ。それなのに幾度干戈かんかを交えたことか」

「ああ、魯の城下の盟は避けられぬ」

陽虎が不機嫌な表情で大臣どもを睨にらみつけると、皆は速やかに沈黙した。

「うろたえるな。能無しどもめが」

陽虎はもはや敬語も使わなかつた。陽虎が不機嫌なのは斉の侵攻自体のせいではなく、そのために三桓家乗つ取りの実行に待つたがかけられたせいであつた。

「斉の大軍などは、どうせいつものように脅しにすぎぬ。適当にあしらつておけばすぐ引き返すだろう。そうではないですか、孟孫殿」

陽虎は孟懿子に当てつけるように言つた。今回の斉の侵攻作戦も孟懿子が糸を引いた可能性が

大きいと思っている。孟懿子は岩のようなしなめ面をして黙っていた。もしそうなら大軍ははったりだろう。取るにしても小城をいじってみる程度に違いない。曲阜まで寄せるなどはまず考えられない。かりに国夏がやるつもりになっても宰相晏嬰が止めるにちがいない。齊の晏嬰ほど国際政治というものを理解している者はいないだろう。今の段階で魯を圧伏する必要性は皆無に等しい。切れる臣ならば必ず止める。そういう点では魯国の者より晏嬰の方がよほど信頼できるというものだ。

「しかし、虎よ、このままではまずいのではないか。おぬしはそうは言うが、このたびの紛争は先年より魯国が仕掛けていったものだ。齊はそれほど甘くはあるまい」

と季桓子が慎重に言ってみた。

「それなら、安心できるようにしてやろう」

と陽虎は面倒そうに言った。

「何のためにここ数年、晋に諂^{へん}ってきたのだ。齊が大軍を動かすのなら晋とても見て見ぬふりではまい。ここは晋にひと肌脱いでもらいましょう」

「晋は断らないだろうか」

季桓子はまだ不安そうに言った。

「それは子^こしだいだ。さっさと晋に行つて土下座でも何でもしてきてもらいたいものだな」

「わしが使者となるのか！」

「もう晋のお歴々とは馴染^{なじ}みのはずだ。さあ魯兵が全滅せぬうちに来援してくれるようくれぐれも頼みますぞ」

季桓子は取るものもとあえず、晋国に走らされた。